

三 浦 巡 検

福 島 依 子

景勝地に恵まれた三浦半島は、観光地として四季を通じにぎわっている。城ヶ島もポピュラーな遠足地として知られる。そこへ我々二年生一同は元気良く（電車内でのパニックやそのお陰で一行に間に合うと言う遅刻者も出たが）クリノメータを片手に出かけた。バス降車後、予想に反してしっかりと晴れた夏空の下、城ヶ島の地層を浅海先生の指導のもとに確認を進めていく。第一に白色の火炎状の凝灰岩の地層を観察、その後海食台地の露頭（三崎層）を写真等に収めつつ、走向等をクリノメータで計る。（クリノメータに慣れぬ手つきが四苦八苦し、走向・傾斜値をなんとか出す）昼食後、城ヶ島で最も高い所に登り、茂みをかき分け、腐食土が20%以上と言う世界的にも珍しいと言われる黒土を見る。その後徒歩で城ヶ島大橋を渡り半島部に出、三浦半島の“宝庫”たる所以の裏付けがなされていく。まずはじめに波食層を見る。漁業組合の手前では、海に突き出た岩の“漣痕”を見たが、これは神奈川県により天

然記念物に指定されている。“左右非対称の波模様が見事に描き出され、これは第三紀中期、海底に堆積した泥や砂が一定方向の底流で転動していた際、転動部分の表面に生じた小さい渦により主成されたものである（後略）”と説明文に揭示されており、これが地層に残され、変動により海面上に露出し、侵食されて現在に到り、流動漣痕と呼ばれている。またしばらく行くと、同じく天然記念物に指定された三浦市海外町のスランプ構造が観察される。途中で褶曲構造のようにになっている。灰白色のシルト岩と黒色のスコリア質砂岩の有律互層からなり、異常堆積とよばれるもので、シルト岩・砂岩が未固結のコロイド状態の時に海底地すべりにより生成されたものと考えられている。また急流によりはぎとられたように一部がひっくり返った地層が見られたり、実に楽しい地質観察の道程であった。

（7月10日 浅海教官指導）

北 佐 久 巡 検

清 水 慶 子

私達1年生にとって初めての宿泊巡検は長野県北佐久地方、まだ強い日ざしの残っている9月7日だった。テーマは「北佐久地方の旧宿場町の変遷」で、井内先生指導の下、軽井沢・小諸・望月を訪ねた。

軽井沢駅前に集合後、駅前通りを歩いて行ったが、さすがは夏の軽井沢、まるで東京の街中を歩いているようだった。バスに乗って町役場へ向かう途中から雲行きがあやしくなり、役場に到着してから、夕立のような雨が降り始めた。その上ものすごい雷が鳴り、停電。山の天気の変わりやすさを改めて感じた。ヒアリングによって、軽井沢の

別荘がいかに多く、そのための行政が大変であるかがわかった。

追分の旧宿場町は、中山道からはずれて国道が通っているので、江戸時代・明治時代に来てしまったのではないかと思われた。先生から、分去れと樹形の茶屋の説明を聞いて、近くに住んでいる荻原さんのお宅におじゃまし、中山道と北国街道の成立過程・追分宿の変遷についてお話していただいた。それから旧本陣や別荘を見ながら堀辰雄について聞き、浅間神社で荻原さんとお別れして私達は信濃追分駅へ。

しかし、予定の列車が大幅に遅れており、旅館